CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

<資料研究>

アンモニウス伝述『シナイ山とライティに於ける師父達の殉死の話』(アラビア語版)解読の試み

谷　口　　勇

1973年ソヴィエトのグルジア共和国の首都トビリシの一書肆から，*Arabsko-grujinskie versii povesti Ammonija "Ubienie sv. ottsov v Sinae i raife"* なる珍しい冊子が発行された。表題の通り，これはアンモニウスの物語のグルジア語訳とアラビア語訳（九〜十一，十三，十七世紀の写本）を収録しており，その他に，R. V. Gvaramija の研究（グルジア語）と要旨（ロシア語）を含んでいる。

ところで，*A Dictionany of Christian Biography* (ed. by W. Smith & H. Wace), N. Y., 1974, vol. I. p. 102 によれば，Ammonius なる僧が4名出ているが，我々の物語の作者は(4)に相当する。この名前はエジプトの神 Ammon に由来し，エジプトでは頻用されていたのである (O. Bardenheuer, *Geschichte der altkirchlichen Literatur*, Bd. IV, Darmstadt, 1962, pp. 164−5)。彼は四世紀のカノーポス(Canopus. 下エジプトの古代の港市で，Alexandria 東方24km に位置す）近辺の隠者だったが，Flavius Valens 皇帝（364−378.ローマ帝国の東帝）から迫害されて，パレスチナに，次いでシナイ山に逃亡した。ここで彼はサラセン人達による僧院や庵の破壊を目撃した。彼はここから更にメンフィスに逃げ延び，そこに庵を建てた。以下の物語から明らかなように，彼はまた同時にライティ(Raithi)に於ける同じような破壊について述べている。

アンモニウスの『シナイ山とライティに於ける師父達の殉死の話』(以下『殉死の話』と略す）は，種々な言語を通して伝えられて来た古代キリスト教文学，より特殊的には聖者伝，の一つに属する。

元来，この『殉死の話』はアンモニウスがコプト語で書いたものであるが，

キリスト教世界に広まったのは，僧ヨハンなる者によるギリシァ語訳を通してであった。この僧はナウクラティス（Naucratis. ナイル川の三角洲上にあった古代ギリシァ都市）近辺の或る僧の許でエジプト語（コプト語）写本を発見，この言語を熟知していたので，ギリシァ語にこれを翻訳した（ギリシァ語版奥付—F. Combefis, *Illustrium Christi martyrum lecti triumphi*,Pariis,1660〔これはCombefisのラテン語訳を含む〕, p. 132, cit. in: Gvaramija *op. cit.*, p. 062）。ギリシァ語版は七世紀から十七世紀にかけて流布した。その他，パレスチナ・シリア語訳（七世紀），スラヴ語訳（十四世紀），アラビア語訳，グルジア語訳が行われており，しかも大抵の場合は，一つではなく複数の写本が伝わっている。

このように,『殉死の話』が流布した理由は，これが若干誇張されているにしても或る程度の史実を含んでいたからとも考えられる。アラブ人やブレミア(エチオピア）人によるシナイ山およびライティ荒野における僧侶殲滅が373年に行なわれたことは，St. Schiwietz が確証したところであり（*Das morgenländische Mönchtum*, Bd. II, Mainz, 1913 , pp. 8−12），この事からも，逆にAmmonius が上述のように四世紀の僧だったという結論になるのである。

『殉死の話』アラビア語版は八世紀に遡り，アラビア語によるキリスト教文学の初期の文献に属する。この事については専門的研究書の中で言及されながら，この版は今日まで研究されることもなく，また，他国語版の写本については公刊されて来たにも拘らず，アラビア語版写本はひとつとして刊行されたことがなかった（Gvaramija., *op. cit.*, p. 062)。

現在伝わるアラビア語写本は「大英博物館」所蔵のもの(Brit. Mus. or. 5019〔51v−58v〕—十〜十一世紀—）と,「シナイ山聖エカテリーナ修道院」所蔵のもの(Sin. ar. 542〔8r−15r〕—九〜十世紀—; Sin. ar. 557〔111r−144r〕,Sin. ar. 400〔200r−208〕, Sin. ar. 401〔251r−261v〕—いずれも十三世紀—; Sin. ar. 423〔390v−399r〕—1623年—)があり，これらを内容上，二系列に分けることができる:

Brit.	Mus. or.	5019	(A)	Sin.	ar.	400	(D)
	Sin. ar.	542	(B)	Sin.	ar.	401	(E)
	Sin. ar.	557	(C)	Sin.	ar.	423	(F)

Gvaramija は左系列を τ，右系列を q で表記し，それぞれの系列を（A）と（D）で代表させている。他の写本は必要に応じて脚注に本文研究資料として供している。

このうち，以下に述べるように，τ系列の方が古く，またτ系列のうちの写本でも（A）はグルジア語版に最も近似性を示している（Gvaramija *op. cit.*, p. 074）。この理由から，今回は（A）を基礎にしたτを底本として，以下においては，エジプト人 Nabil El Zahlawi 氏の協力の下に解読を試みることにした。

なお，τ系列の写本の奥付には試訳（XXIII参照）にある通り，イスラム暦155年と明記されているので，西暦772年にアラビア語に訳されたことが判明するのであるが，この事実は注目に値する。アラビアで書かれたキリスト教文学の起源が八世紀に溯るということは，これまで二・三の学者の仮説であったが，この『殉死の話』アラビア語版は年代の明示された最初の関係文献であるのみならず，実際，八世紀にかかる文学が存在したことを確証する結果にもなったからである。

底本とした（A）のアラビア語は所謂“教会アラビア語”(Christian Arabic）であり，古典アラビア語に比べると相当に方言化が著しく，反復が多く，しばしば難解である。若干不明な個所もあるが，敢て訳出してある。大方の教示を乞いたい。ギリシァ語，グルジア語各版との比較研究は今後の課題としたい。

（9—VI—1979）

シナイ山とライティにて殉死せし師父達に就て僧アンモニウスの伝へし話

イエススは我神にして我希望なり，聖母は女神にして我代言者なり。茲はライティとシナイ山にて祝福されし殉死を遂げし，我等が師父達の話なり。

Ⅰ　我等が祝福されし師父アンモニウスは同僚達に斯く語りき。「余，当時の或日，アレクサンドリア近傍のカノーポスと呼ばれし場所の庵に坐せし折，パレスチナに赴かむとの気分湧き起これり。毎日，災厄が為，同僚の基督教徒達に生起したる事や，異教の神々に祈願したる無神仰者共より蒙りし不幸を眺むるは辛抱し難かりしが故なり。

Ⅱ　「斯て我等が父，アレクサンドリアの族長なる聖マリア＝ペテロは次から次へと逃げのびたり。牧師の面倒を見る事容易に能はず，隠れて，人目をはばかれり。又聖地にて祈る事，甦りたりし墓〔キリストの墓のこと〕に脆く事，イエススの訪れし場所を望み見む事，而して聖書中の偉大なる数節を説かむ事を願望せり。されば余は神に余を助け給はむ事，我が道中を容易にし給はむ事（？）を冀ひたり。我神は聴許せり。されば有難き次第なり。

余パレスチナに到着せし時，余の望みし儘に我神に祈りを捧げり。斯て余に手筈を整へ給ひし我神に感謝せり。然る後余は亦シナイ山にて祈らむと欲せり。我神は善良なる基督教徒の一団に組しつつ，之を促したり。

Ⅲ　「斯て我等はパレスチナより出立ち，開けたる道路を選べり。十八日目にシナイ山に到着せり。斯て彼の聖き，祝福されし場所にて祈りを捧げたり。而して余は其処に数日滞在せり。我等が聖なる神々しき師父等より祝福を受けむが為，将又彼等の祈りを得むが為なり。されば毎日彼等が庵を訪ね，良き教訓，有益なる説教に與りたり。彼等は金曜毎，聖なる山の麓の庵に滞在せり。又土曜の夕には，教会に集ひて，日曜の前夜，彼等は挙りて日曜近く迄祈りを

捧げ，然る後，銘々庵に戻れり。

彼等は祈りに在ては天使に似たり。日中の甚しき断食，夜の不眠に依て（彼等は身体の事に頓着せざればなり），顔は黄ばみ，身体は衰弱。又彼等は現世の快楽，酒類，オリーヴ油，パン，孰れにも頓着せず，身体の為には幾何かの棗椰子の実と少量の果実のみ。又僧院長が為には信徒の献げし幾許のパンのみ有りき。

Ⅳ「扨，数日後，アラブの酋長死にたれば，彼等〔アラブ人たち〕人々を迫害せり。人々の或る者（山麓の庵に居りし僧達）は思ひ掛けずも殺されたり。又教会の有りし塔の近くに居りて事件を感ぜし僧達は塔の中に逃げ，聖なる僧院長ドウラに加はりて救はれり。実に彼はキリストの熱心忠実なる信者なりき。人々の間にありて穏やかなる者の一人にして，いとも寛大なりしが故，第二のモーシェと称されたり。

ジャスラ，ハウリーブ，コウザール及び他の一切より来たりし僧達はアラブ人にて殺されたり。塔に迄到りて，我等をも将に殺さんとせり。我等に彼等をして止めしめん者無く〔無防備だったという意〕，或ひは彼等に何事か告ぐる可き者とて無く，衷心より祈願せし全ての者に助けを垂れ給ふ慈悲深き神有るのみ。神はシナイ山の塔の上に火の地獄を示したれば，山の頂之皆煙を発し，火は天に迄上れり。されば我等，之を見し時，いたく驚倒し，心臓も止まり，皆顔を下に平伏して，我等が陥りし災難と悲惨より我等を救ひ給へと神に冀ひたり。

Ⅴ「火を見し時，アラブ人達はいたく怖れたり。彼等は仰天して駱駝と武器を残して遁走せり。彼等が遁走せし時，我等は偉大なる神に対して多大の感謝を捧げ，又彼等の既に逃亡したるを悟りし時，我等は塔より下りて，山麓の僧庵に出掛け，彼等に殺されし僧達を探したり。殺されたる三十八体に多数の損傷を見つけり。彼等如何にして殺されしか，其様を我等に告ぐる者は見出さざ

りき。三十八名の僧の殺されし光景を目撃せし者無し。ジャスラビー出身の十二名を見つけり。又他に負傷せしが未だ存命の二人を見つけり。其の一人の名は師父サイヤー，又他の者は師父サーバーなり。されば僧達を葬り，亦大いなる悲しみと苦しき叫びもて，負傷者達の手当に取掛りたり。

万事かかる状態にては，石の如き心を持ち，憐憫の情に欠くる者と雖も，此老人達を眺むれば，涙し，悲しみを覚へ，心砕かれざらむ者無し。昼夜断食と祈りと懇願にて神を讃へ来たりし老人達が死して横はり，其の或者の頭は皮膚にて胴体に垂れ下り，次の他の者は胴より二片に切断，亦他の者は頭上への甚しき打擲にて眼球飛出し，亦他の者は手脚切断せられて草の束の如く投げ捨てられて有り。同胞達よ，安んぞ書き連らぬべけむや。殉死者達の死体を探せし時，我等が目撃したりし事の再話し得む者一人とて無し。

負傷者の一人なる古老師父サイヤーは翌日夕べに歿したり。されど古老師父サーバーの負傷深からざれば，恢復するを得，されば身に振り掛りし事を神に感謝したり。而して彼の友等と共に殺されざりしが故に憂慮せり。彼泣き叫びて曰く，『嗚呼，悲しき哉，余は誤まれり。嗚呼，悲しき哉，余は十一時頃に拝顔せし基督の為に殉死を遂げし我が師父達が如くに，著(しる)けき約束を受けざりき。嗚呼，悲しき哉，余は王なる神に目(ま)見へむも神に加はらざりき。』

而して彼訴へ続けて曰く，『万物の所有主なる神よ，人類を正道に導かむが為，汝が息子〔キリストのこと〕を汝の欲せし儘に復活せしめし神よ，唯一の慈悲深き頼もしき神よ，汝が為，汝が御名の為に殺されし我が聖なる師父達と余を隔てし物〔相違〕は皆無なり。されど余が存在に依て，然り我神イエスス・基督よ，余は汝が聖なる四十名の僧の数を全ふせり。余は運悪しく罪人なりしが故に斯く願ふ次第なり。余が幼時此の方，欲し愛せしは汝なり。』彼全身より斯く述べたれば，神，彼の意志を聴許し給ひ，聖なる師父達の殺戮後四日目に彼の命を奪ひけり。而して神は聖なる師父達の殉死数四十を成就せり。彼等が殺戮は西暦三月二十八日の事なりき。

VI 「聖なる師父達の為，我等互ひに悲嘆に暮れ，眼に涙浮かべし折，偶々イスマイルなる族より或者来りて，アビシニア人達紅海に出で行き，ライティ荒野に居りし僧を殺尽せし旨告げたり。

此の山より紅海岸への距離は徒歩二日程にして，其処には聖書〔出エジプト記，15：27〕に言はれし如く,十二のオアシスと七十本の棗椰子の木有りしが，今日，其棗椰子の木甚だ多し。されば我々は其男に，如何様に僧達の殺されたるや，亦幾人殺されたるか，亦何時殺されたるやを尋ねたり。彼曰く,『知るに非ず，唯ライティに居りし僧達の殺されしを聞きしのみ』と。又他の人々来たりて其事に就きても我等に報告せり。

数日後，一人の僧ライティより我等の処に来たりてシナイ山に住まはむと欲せり。ライティ破壊され，其僧達殺されしが故なり。さればシナイ山の長ドウラ彼を衷心より受け入れたれば，ライティより我等の処に来たりし此僧に対して，師父達の如何に殺されしか，亦何時殺されしか，而して殺されし者幾何か，将亦如何にして彼が敵より救はれしか，語り述ぶるやふ頼みけり。彼，我等に語り始めて曰く,『余は長年以来ライティに住みたるに非ず，余は二十年来其処に住みたるに過ぎず。されど他の幾許の人々は長年以来其処に住みたり。或者は四十年来，又他の者は五十年来，又他の者は六十年来，又他の者は其より長く，他の者は其より短かし。他の点に就ては，其地勢たるや，北に長き低地を呈し，其幅十二哩を越へ，又其東は壁の如き山なり。此地を知らざる者は，歩き廻るに容易ならざる土地と言ふならむ。又其西は紅海にして，大地に迄延び出でり。語られし処に依れば，彼の海岸には十二の水源を擁せし山有りて，多数の棗椰子を繁茂せしめ，亦其近くには，他の棗椰子を繁茂せしむる多数の泉有りて，海に注ぎたり。

此山中にて，サリーフ〔予言者パウロスのことか〕に述べられし如く，大方の僧達は岩穴，山，地の割れ目〔ヘブライ人への手紙，11：38〕に住みたり。彼等が日曜日に相会せし教会は山の近くに有れり。実に彼等は聖人にして地上の天使なりき。彼等は肉体を（其は彼等のものならざればなり）既に拒みたり。

彼等の祈祷法は証示能ふ一種には非で，多種に及べり。長老達は神の託せし事を暗誦したるが，耳亦舌有せし者とて，彼等の如何なる祈祷を行ひたるか，又彼等の見得ざりし敵なる悪魔に対して如何に闘ひたるか，言ひ表はす事叶はじ。而して神彼等をして悪魔に耐へせしめたり。されば彼等の魂の如何に敬虔なるやの状況を諸氏に知らしめむが為，一人乃至二人に就て余は語り伝へむ。

Ⅶ 「師父モーシェと呼ばれし僧ありき。幼時より僧籍に入りたり。彼其土地の住民なるファラン人と馴染めり。七十三年留まりて教会近くの山中の洞窟に住めり。実に彼は第二のエリヤなりき。彼万事を神に求むるや，神之を彼に与へたり。而して神，彼に依て多くの民を治癒せしめたり。神，悪しき魂に対する力を彼に与へ，又其力に依て，当地に住みし尋常の民達に勝利を得せしむ。蓋し神の力にて示されし御言葉を民達目したればなり。而して民達驚愕せり。彼等神基督を信じ，多くの民の集ひし神の教会に来りて之に縋りぬ。民の多くは神の助けに依り，師父モーシェの力を介して狂気より救はれり。

此師父モーシェ，庵に於て唯一神の存在を確信せし間〔神に祈っている間〕，パンを食せず。果物とては僅かの乾棗椰子の実のみ。飲物は壺に有りしもの，又衣服は黄麻より作りしもの。而して彼沈黙を好み，夜祷後に眠るのみ。亦断食中にては何人にも話し掛けざりき。聖木曜日に至る迄庵の戸を開けず。数にして二十個の果物と僅かの水有りき。されど彼の弟子の話に依れば，彼戸を開くる迄孰れをも食せざりしと見ゆ。

而して或断食の折，彼が処に負傷せし一人の男連れ込まれたり。アビダノスと呼ばれし族長にして，治癒を求めり。されば彼等師父の庵の近くに到れば，悪魔彼〔アビダノス〕を強く締めつけり。而して彼叫び出して声高に日く，『我師父，この悪しき老人よ，汝の祈祷より面白きもの見つけむに一時とて成功し得ざりき。』かくて彼斯く言ひし時，悪霊彼より去りたり。而して此時より，彼，神基督を信ぜり。又彼のみならず，洗礼を受くるべき彼と共に有りし人々も〔信じたり〕。而して彼等，神に感謝しつつ帰宅せり。されど我等が善良なる師父モ

ーシェを目せし者無く，又断食中の彼に話し掛けし者も無し。

又他の夥しき事に就き民達論(あげつら)ひたり。其事柄夥しければ，余之を言ひ表す術なし。彼に一人の弟子ありき。四十六年以来，彼の〔庵の〕上に住みたり。マリース族に属し，其名はイソウィス。祈りと善良さに於て師に似たり。而して殺されし師父等の一人なりき。

Ⅷ「又師父ヨセフと呼ばれし別の僧ありき。イーラティ族出身にして，泉〔オアシス〕より約二哩離れし彼の岩に住めり。教養深く，賢者の一人にして，万事に於て完璧なりき。而して神，彼と共に三十年近く彼の開けたる場所に住めり。彼，近くに住みし弟子有りき。

当時の或日，僧の一人，彼の処に来たる。何事かに就き尋ね，彼より教育を受け，彼の言より得むものとて。彼の面前にて戸を叩くも返事なし。されば戸を通して中を窺ふに，彼頭より足に至る迄火中に燃ゆるを見たり。祈祷しつつ立ちたるを。僧，恐怖の余り心臓も止まり，死人の如く倒れて，永らく地上に横はれり。やおら目覚むれど，彼の聖者は祈祷に忙殺，神に語り掛けつつ有りて，彼に気付かざりき。

而して五時間後，聖者振向きたれば，彼の僧再度戸を叩けり。斯て師父ヨセフ・アレイ彼が為に戸を開きて，何時此処に来たるやと尋ねり。僧答へて曰く，『暫(しばし)五時間前より来れども，余汝を妨ぐるを欲せず，為に此時迄戸を叩かざりき。』

されば聖者其時，此の僧に彼の知識授かりたるを知れり。此の僧彼に何ら告げざるに拘らず。而して此の僧の尋ねし事全てを聖者拒まず。又僧の語りたりし，身に伸し掛かりし事より，心を癒やしめたり。

其後，聖者，彼の知識の民達の間に広まるを恐れり。されば事実の秘められむ事を神に祈願せり。秘密守られ，彼，何人にも現れざりき。

Ⅸ「彼の弟子，聖なる師父ジラシウス来れり。至る処探したれど聖者見つ

からず。されば彼，庵に住めり。而して聖者の不在を悲しめり。其日より六年と九時間経ちて後，彼の庵の戸を叩く者有り。されば ジラシウス出行きて，師，戸口に佇むを見出し，其事に驚愕せり。悪霊の師として現れたると思ひたり。されば此に祈祷せむことを求めたり。されば老師祈祷せり。而して弟子〔ジラシウス〕彼にいそいそと口付し，彼等互に掻き抱き，聖約の言葉を唱へつつ互に口付を交せり。

老師，弟子に語りて曰く,『余の場所に来たりて住むは良き考へなり』と。亦悪魔の策略多ければ，何事にあれ，事前に祈祷せむ事を要求せり。弟子応へて曰く,『何故に友達より姿を消し，汝の弟子を一人悲しみに放置したるや』と。老師答へて曰く,『若者よ，余としては何人にも会はざりき。唯神のみぞ知る。日曜毎，余自ら，血肉なる神基督の教会に於て汝等の近くに来りし時のみは，神其場所を去らざりき。』此時，弟子驚愕す。聖者，誰にも見られずして出入し得ればなり。

而して彼，師に尋ねて曰く,『何故に今汝が民の許に来るや』と。師答へて曰く,『今日，余哀れなる肉体を出て，我神の許に身罷らむと欲す。我身を汝の望が儘に葬らむが為，且多くの死体の属せし大地に与へむが為，之を汝に残さむと欲せり。』又師，弟子に対し，何が魂を豊かにせしむるか，何を我等来世より要求せむかを話して説明せり。然る後東に向きて横はり，手脚を拡げて静かに遷化せり。而して神の手中に魂を捧げり。

然る後，弟子急ぎ馳出して，仲間の僧に告ぐれば，彼等詩篇を携へつつ，素早く其場に来りて合唱す。彼等死体を教会に運べり。死者の顔，陽光の如く輝きたれば，我等皆，彼に祈祷せり。而して彼より前に身罷りし他の師父達の近傍に葬りぬ。

X 「又余は出来事，僧達，神が彼等に加勢し給ひて為せし保証に就て，汝等に話を告げむと欲せり。されど之に就きては，師父達の如何に殺されしか，又敵如何に彼等を攻撃したるか，汝等傾聴せむと欲せしものと見受けたり。され

ば之に就て汝等に語らむ。

師父達斯くの如く万事に於て用意有り，命は唯神に捧ぐるのみなりき。其町の住民等エジプトより小麦を運ぶを常とす。彼等，師父達の仕事の引換へとして少量を与へり。而して師父達の仕事は断食と神基督への深き祈願なり。彼等総勢四十三名の僧なりき。各僧独居房に住して，彼等に生命を授けし神を除き，各自の有せし物を互ひに知らず。蓋し，神，各僧の秘密を知り給ふが故なり。而して万事は善良なる神の物なるを知るは神のみなりき。

XI 「我等斯くの如く有りし時，海中の島より二人の男来れり。エチオピア方向の未知なる森の住民なり。彼等，我等に告げて日く,『エチオピアの一群彼の島に赴きて，所謂イラー船を見つけたり。而して之にてカルザムに渡らむと欲して，之を入手せり。』亦我等に日く,『汝等を殺戮せずんば，我等をカルザムに案内せよ』と。されば我等，彼等〔の殺戮〕より免れむ事を約束されたり。而して我等風の吹きて移動せむ時を待てり。

神，我等を保護せむと欲し給へり。されば我等，此等の丸木舟にて夜間逃亡し，汝等の許に来り， 彼等を船主諸共，彼の島に残したるなり。されば彼等，汝等の場所を過ぎてカルザムに赴かむ迄，数日汝等の注意せむ事を述ぶる次第なり。亦彼等，汝等を殺戮せむ。彼等悪しき民なり。而して約三百名居れり。

我等斯くの如く為せり。多くの民を海岸に配して，彼等船の来るを見れば，我等に告げむとなり。而して我等，神我等を選び給ひ，御心の我等に有らむ事を神に祈りにけり。

XII 「斯て翌日夕方，我等の方に来る一隻の船見ゆ。さればファランに住み戦闘に慣れし民達は彼等の妻子，駱駝の為に戦闘の準備を整へたり。而して二百名の男子，彼等の妻子と共に山頂に集結せり。我等僧達は，身の丈二倍近き長き壁に囲まれし教会に逃避し，扉を閉ざせり。

斯て彼等〔敵〕港に到着せし時，彼等留まりぬ。水夫達は船を率ひたり。

斯くて彼等其夜を泉の近くの峡谷に過せり。朝来れば，水夫達を捕へ，彼等を此の場に残せり。又船には或者〔水夫〕を残して，夜間の監視と船の操縦を委ねり。而して彼等泉に戻りて，戦闘に依てファラン人と立向へり。

戦闘は泉に近かりき。泉の間の丘の近くにて，彼等弓もて闘へり。激しき戦闘にして，両陣より矢落つること莫大なり。されど嘘言者共はファラン人より多勢にして，より戦闘に熟達し，より邪悪なりき。されば彼等ファラン人を打破り，百四拾七名を殺戮せり。而して残りの者は各自避難所として見出し得し物に従ひて，山中に又樹々の間に逃げ込みたり。彼等嘘言者共は婦女，子供達を攻撃せり。彼等泉の近くに居たればなり。

然る後，彼等猛き獅子の如く，御堂の内側の我等の許に来りて，歩き廻り罵詈雑言もて喚き散らせり。何処にか金子を見出すならむと思ひて。されば彼等御堂を取囲みたるや，外側より我等を脅し始めり。我等，彼等の声を聞くや，恐怖に拉(ひしが)れ，神の許に逃れて，悲しき心もて祈り泣く外為す術を知らず。或者はいと強くして，死に立ち向ひ，良き心根を持てり。而して他の或者は悲しみに打拉れて，強からざる心を持てり。又残余の者は神に祈願し感謝す。又他の者は友達を慰めり。而して皆挙りて神より憐憫を乞ひにけり。

XIII「かかる時，我等が領袖ブゥロス・アル・バトリッシ，教会の中央に立ちて曰く，『陋劣至極の者達よ，汝等は誤まれり。親愛なる同胞(はらから)達よ，汝等皆知らむ，我等此場所に有るは神イエスス基督の為，彼が愛の為なるを。

而して我等，空なる此世を去りて，我等が首の上に啓示を得むとて此空なる砂漠に来るなり。我等，此恩愛を受くるに足る程善良ならざれば，我等誤まれり。我等大ひなる飢餓と貧困もて〔大いに必要とする時に，の意〕，又此世に悲しみもて〔現世を嫌って，の意〕神に祈願せり。而して神，忠誠なる者に約束し給ひし天国を得むが為，我等全てを拒みたるなり。而して今や神の御心を除きて何物も残らじ。又今や，神の斯く欲し給ひし事なくば，神，我等を此悪しき生より救ひ給ひ，我等を抱擁せむと欲せずんば，何事も生起せざらむ。

神有るは，我等彼に依て幸福と慰安を感じ，彼に感謝せむが為なり。而して我等，身を卑しめる事為すまじ。神の聖なる玉顔を拝し彼の説教〔を聴く〕より焉んぞ良き事有らむ。同胞達よ，汝等忘るまじ，我等一堂に会し，聖なる師父達の遺言を読み，彼等の忍苦に驚愕し，互ひに言ひ合ひたる時の事を。至福なり，彼等基督の為に血を犠とし，而して師父と称されたるなり。又我等も彼等の如く有らむと切望せり。されば神の子達よ，我等其の瞬間に差掛れり。彼等と共に，消へ失せし事も変はる事もなき安らかに有りて，彼等の如くならむが為の必然切迫せり。されば泣き叫ぶまじ，悲歎に暮るるまじ，又汝等の如き民に用なき事を為すまじ。而して汝等の奥底より基督の力を帯し，死到る迄，力強く忍耐すべし。さすれば神の御心に依て，汝等其天国に受け入れらるべし。

彼等全員答へて曰く，『至言至極なり。されば我等，神の許にて救はれむよりも，神よりの報ひとならむ事を為さむ。而して聖書のダビデ詩篇と呼ばれし章〔詩篇，116：12—13〕に言はれし如く祈らむ。』

彼，彼等より斯の如き言葉を聞きし時，祭壇の北部に向ひ，両手を天に挙げて曰く，『我等が神万物の主なるイエスス基督よ，我等が冀望強ければ，願はくば汝の僕等を忘れ給ふ勿れ。我等が漬貧と痛苦を覚へ給へ。而して此辛き時に当りて我等を強化せしめ，亦我等が魂をば御意に叶ひし犠として快く承受し給へ。さすれば我等汝の懇志を知らむ。我等寛容なる可し。又我等，父，息子，聖霊の御名に依て，今も後も，永却久遠に祈願すべし。アーメン。』其時，全ての僧応へて曰く，『アーメン。』

而して彼等『アーメン』と言ひし時，或声祭壇を通して余の処に迄達せり。『汝等皆憔悴し，困憊したれば，余汝等を憐憫せむ』と。我等此の声を聞きし時，恐れ戦き，幸福に打ち震へ出しぬ。神，聖書の中にて述べし如く，心はやれども肉体は弱し〔マタイオスによる福音，26：41〕。されば我等皆顔を上げて神を拝み，此世の生を断てり。

XIV 「而るに無信仰者共は長き材木を持ち来たり，之を壁に持たせ掛けて登り，

柵を跳び越へたり。然る後，仲間等に扉を開けたれば，誰人も彼等に立ち向ふ者なく，何事か言う者もなし。彼等皆邪悪なる獅子の如く押し入れり。手には剣を用意して出発せり。彼等の会ひし最初の僧はアルミアと称す者なり。彼，教会の戸口に坐したれば，彼等に仲間の長を案内せむ事を命ぜられり。彼等，通弁役の一人の水夫を有せり。さればアルミア彼等に向ひて日く，『余，彼を汝等に案内する事欲せず。又余，汝等神の敵，無信仰者共を怖れず，意に介せず。』アルミア勇敢なれば，敵共の汚き顔，抜身の剣を見れども怖る事なかりき。而して彼，強き心もて，彼等に答へて日く，『余汝等に我等が長を案内する事欲せず。』其時教会の長彼の近くに居りたれど，彼を対面せしむ事若しくは引渡す事を拒絶す。彼等，彼の勇気と強き心に驚愕す。蓋し彼，彼等を怖れず，又意に介さざればなり。

されば彼等，彼を捕へて其手脚を縛れり。然る後，其衣服を剥ぎて，彼を裸にす。彼等矢もて完全に覆はるる迄彼に突き刺せり。彼其場を離れず，其事を怖れず，従容として其事を引受け，神の手中に死する迄，大ひなる忍耐もて神に感謝を捧げり。彼最初の殉死者なりき。而して彼，神の御名を称へつつ死する迄悪魔を打破りたり。彼，同僚にとりて模範なりき。

斯くて師ブゥロス其事を目撃せし時，彼等の一味の前に姿を現はして日く，『余此処に有り。余，汝等の探せし人物なり。』而して指にて彼等に己が身を指し示しけり。而して彼基督の如く敵共の前に身を曝せり。彼，苦痛を怖れず，又死の前に直面せむ事を怖れざりき。されば彼等，彼を捕へし時に日く，『何処にか隠されし宝の在所（ありか）を我等に示せ』と。彼，彼等に向ひ常の如く穏かに徐に日く，『汝等人間共よ，余自らの言ふ事を信ぜよ。余，汝等見し如く，身に着けし此衣服より外，此世に何物も所持せず。髪よりして老人なり』とて，彼等に手で示せり。

されば彼等石もて彼の首を打擲し始めり。胴体をも顔をも背筋をも矢もて傷を負はしめ，『汝の所持せし物を持ち来たれ』と叫び続けり。斯くて彼等長らく彼を苦しめたれど，彼等の要求せし物一つとて見つかざりし時，彼等の一人，

剣もて彼の頭に中央より一撃を加へり。而して師父の頭二つに割れにけり。又彼等，剣にて彼の胴体を打ちたれば，彼，死の前の大ひなる苦悶の後，倒れて死せり。而して之ぞ悪魔にとりて第二の敗北なりき。彼，死を怖れざりき。其信念弱めらるる事勿らざりしが故なり。

XV 「余は恐々怖しき事を見，師父達の血飛び散り，胃袋外に投げ出されたるを見し時，彼等の手より救はれむが為，避難所としての場を探し始めり。かくて余，僧庵の左手隅に於て，壁の上に立て掛けし棗椰子の〔葉の〕如き物を見つけたり。されば，此等有害なる者共，師父等の殺害に従事せし時，余自ら思ひ周せり。棗椰子の葉の中より出づれば，彼等余を捕へて殺すならむ。さりとも彼等より救はれて，余，師父の死体を葬らむかと。

斯て彼等二人の師父の殺戮を終し時，彼等挙りて叫びを発しつつ教会に押し入りて，剣を用ひて僧達を殺害せり。彼等各々見つけ出せし者を様々に殺害せり。其或者は顔を一撃，他の者は腰，又他の者は臓腑を抉り出す迄に剣を胃袋の中に差し込めり。又他の者は肩に一撃を加へて之を中央〔胃の辺〕迄打ち割りたり。師父の殺戮されし有様は斯の如し。

此僧，我等に語りし時，泣き止み得ざる事いと激しければ，我等亦，言葉声になり得ざる迄，彼が泣涕に貫ひ泣きせし程なり。彼，言ひ続けるは，『汝等同胞達よ，余何をか語らむ。余の目撃せし事より何をか説かむ。』

XVI 「師父ソロモンと称せられし或僧有りき。彼に十五歳になる親戚の僧ありて，師父，彼に幼時より説教の仕方，並びに悪魔達との上手なる闘ひ方を教へり。斯て神の敵なる彼等，美しき此若者を見掛し時，彼に好意を抱き，之を共に連れ去りて使はむと欲せり。されば彼等の一人，彼の外出せる処を捕へたり。斯て少年之を見し時，僧なる彼は其仲間と共に殺されざらむ事を欲せり。されど彼等，彼を捕へむと欲す。彼いと悲しみて泣き叫び始めり。而して其の悉く益なきを悟りし時，彼我身をも意に介せず，臆せずして，彼等の一人より

敢て剣を取上げ，エチオピア人達を怒らせむが為，其の一人の肩を打ちつけたれば，彼等彼を殺せり。

此事彼等をいたく怒らしめたれば，彼,『我を此等の無信仰者共の手中に渡しめざりし神に感謝す』と叫び続けたるを，彼等剣もて切り刻めり。斯て彼死に至り，基督に見ゆる迄言ひ続けしが，彼の死後も，彼等立腹せしが故に尚も剣もて打ち続けり。彼等が神の僕セルジウスを盗みたる有様は斯の如し。

余此一部始終を目せし時，我親切なる神に対して，余，彼等より救はれむ事，又彼等を盲目たらしむ事，願はくば，師父の屍体を葬らむが為，余のみなりとも救はれむ事を懇願し始めたり。

斯て教会の到る処に於て殺されたり。されど皆怖るる事，或ひは無念がる事も無かりき。幸せ也とて，生起せし事をば神に感謝を捧げたり。憂き世を離れて，聖霊の間に住まむ為に基督に依帰したればなり。而して彼等此の世の全てを捨てて，唯一神に従ひぬ。然る後，皆敵達の剣にて様々に殺害せられたり。

XVII「彼等を殺したる後，敵共は金子の見つからむと思ひて，教会及び家々を捜し始めり。彼等知らざるなり，師父達此世にては何物も持たざるを。後者にとりては，天国が基督の迎へ入れし場所なり。而して余，敵共の捜し居れるを見し時，血の気失せて，怯えを感じたり。彼等程無く余が場所を発見して余を殺すならむと思ひしが故なり。余，棗椰子〔の葉〕を通して彼等の多勢を見たり。彼等来たれば，余，我眼にて我死を見るは必定。されば余，神に懇願せり，彼等の手より余を救ふは彼〔神〕にとりてより良き事ならむやと。而して彼等棗椰子〔の葉〕を見し時，之に気付かずして去れり。神，余を救ひ給ひ，彼等をして，余に触れざらむが為，盲目ならしめし次第，斯の如し。

さて彼等，師父達を累々と殺戮して去れり。取るべき物何一つ見つからざれば，彼の船にてカルザムに赴かむと望みて，彼等の場所に戻れり。彼等船の破壊されたるを見出せり。其が監視の任に有りし男，共に居りしエチオピア人共を殺し，船を舫(もや)ひたりし綱全て断ちて，船を沈めしめ，自らは泳ぎて山へ逃げ

たればなり。彼，神にて救はれし次第斯の如し。此時，彼等スーダンとの関係を失へり。而して為す術，或は彼等の国へ戻る術を知らざりき。而して悲しみと怒りの余り，彼等の受取りし多勢のファラン出身の婦女子供を全て殺害したるなり。

然る後，彼等大火を起して一切の棗椰子を燃したりき。

此等の獰猛なる一味，彼等の国に戻る事能はざりしが故，身に振り掛かりし事に懸念したる間，イスマイル族の精鋭，六百名の戦士より成れる，ファラン出身の一群到着せり。其情報広がり，スーダン人達危険を感知したれば，戦闘の準備を整へて海へ向ひたり。而して両陣営戦闘を開始せり。

戦闘は朝平原に於て矢を用ひて始まれり。されどファラン出身の戦士の数，敵より優りて，之を殺し始めり。而して敵，彼等の国へ戻る希望，生くる希望を失へり。されば彼等朝より夕九時迄，海辺にての残酷なる戦闘の手筈を整へたり。而して同日，ファラン出身者八十四名殺されたり。又多くの民殺されたり。されど神の敵スーダン人悉く同じ場所にて殺されたり。一人とて逃げる者無く，皆殺されたり。

XVIII「戦闘行はれたる間，余棗椰子〔の葉〕より出でて，師父達の屍体を探し始めり。而してダメヌス，アンドレイウス，アリオンの三名を除き，皆殺されたるを発見せり。ダメヌス脇腹に強打を受け深手を負ひぬ。されどアンドレイウスは多くの傷を負ひたれど斯く深く無ければ治癒せり。アリオンに就ては，如何なる傷も無かりき。剣の一撃彼の衣服を断ちぬれば，彼を撃ちし男，彼他の死者の間に倒るを見し時，彼を殺したるものと思ひたればなり。されば彼立ちて，余と共に師父達の屍体を探しけり。而してファラン人，敵を殺して戦闘を終へし時，此等の屍体をば鳥と獅子の為の餌食として海岸に投げ捨てり。而して山麓の滝近くの洞窟にて死せし仲間を葬り始めたり。

XIX「其時彼等領袖アビディアヌスと共に我等の処に来たれり。彼等師父達

の屍体床上に置かれ，基督教の守護者達殺されたるを見し時，大いなる悲しみを感じにけり。而して，無慈悲に狼にて羊の如く咬切られし場所に於て，真の基督教徒として，彼等顔を叩きて泣きぬ。然れども基督の信者なる殉死者達は之を全て善意もて受け入れたり。彼等，地上の良き事として自ら手を貸して捧げし事によりて，天国に導かれむ事を知りたればなり。神，彼等の為せし事をば労働と祈願として受け入れ給ひしが故なり。

我等，彼等の屍体を一個所に集めし後，基督の賛美者なるアビディアヌス，並びにファランの残りの指揮者達，高価なる衣服を持ち来りて，師父達の屍体を之にて覆ひたり。三十九名の師父達なりき。

ローマ人ドミヌスに就きては，彼は死なざりき。而して其国に居りし全ての者，師父達を受け入れむが為とて棕櫚の枝を携へて一個所に集ひぬ。されば我等殉死者達の屍体を運び，大ひなる満足と感謝もて，彼等をば御堂の北部に葬れり。

而して夕にドミヌス殁せり。彼，殉死せし師父達に近き反対側に別に葬られたり。我等，師父達を妨げざらむが為に，彼等の墓を発(あば)く事を好まざればなり。

此等師父達の殺されしは西暦三月二十八日午前九時の事なりき。アンドレアヌスとオリオンに就ては，余，彼等を放置せり。彼等留まるや，それとも離れむや，決心つき能はざればなり。而して余汝等の許に来れば，余彼の場所の災難を見能はざりき。アビディアヌス，我等長く留まるべしと頼み且強要せり。而して我等の欲せし如く我等の凡ゆる望みを充たす事を約せり。然れども我等此世に就て頓着せざるが故に拒みたり。

XX 「又余に更に暇有りせば，他に多くの事を汝等に語らむとぞ思ふ。然れども余汝等に乞ふ，此処に起こりし事，此処にて師父達の殺されし有様を余に語り伝へん事を。余彼処にて起こりし事，汝等に告げたれば。

されば我等に起こりし事を彼に語りたり。而して我等皆，神の御意に驚愕せり。又〔シナイ〕山とライティに於て同日，同時，同数の殺戮生じたりし有様

に驚愕せり。而して之ぞ我等が泣涕し，我等が悲しみを新たにせし点なりき。而して我等神に感謝せり。

XXI 「其時，我等が師父にして長老なるドウラ中央に立ちて，以下の如く言ふやふ，『親愛なる者よ，彼等は神の真の信者なりき。彼等其誠実の故に選ばられたり。而して神，彼等を大ひなる王国の一部とし給ひ，彼等大ひなる殉死者なれば，其行為に応じて彼等に与へ給へり。然し我等としては，我等が基督に心を配りて祈願し，御心に背く可からず。同じく又我等，此等の師父達を助け，神への贈物としての我等に，彼等をして信を置かしむ可し。』彼斯く言ひし時，我等愈よ心地良く強くなりたるを感じたり。而して我等必死に神に感謝を捧げり。」

XXII 余は罪人アンモニウスなり。余カルタスに於て此話を認めり。然る後，余エジプトに戻れり。而して折々之を読みたり。余，神に対して，善き殉死者達を選び給ひし故，目出度き事とて感謝せり。而して余，父なる唯一神，子〔なる基督〕，聖霊の為に祈祷す。又神の御為には，今も永劫にも，敬意，祈願，王国の有らむ事を。アーメン。

XXIII 殉死，師父達に生起したるは無神仰者なるローマ皇帝ダクリタヌス〔Diocletianus, ca. 230～ ca. 313 のこと。晩年にキリスト教の絶滅を試みたが失敗した〕の治世なり。而してダクリタヌスの死以来，本書四百七拾四年目にアラビア語に訳されたり。本書はアラブ暦百五拾五年のラビア第Ⅰ月にギリシァ語よりアラビア語に訳されたり。されば之を読み，且又之を訳せし者，之を訳し，且又之を書きし者の為に神に祈るべし。神，彼等を赦し給はむ事を望みつつ。